

# オンライン授業の新段階 ——学習スタイルと学習環境の変化に関する考察——

宮崎 耕

同志社大学 経済学部

kmiyazak@mail.doshisha.ac.jp

**概要：**同志社大学経済学部では、2001年度からICT基礎をテーマとする科目でオンデマンド型インターネット授業を実施している。2012年度秋学期には当該科目の履修登録者(917名)のほぼ全員がオンライン授業を選択し、教室授業の登録者は僅か4名となった。本論文では12年間の受講データの推移をしめしながら、通学制大学としては画期的ともいえるこの状況について考察し、今後の高等教育の革新の可能性を展望する。

## 1 はじめに

同志社大学経済学部では、2001年度からICT基礎をテーマとする科目でオンデマンド型インターネット授業を実施している。当該科目では教室での通常の対面授業も同時開講し、受講希望者は履修登録時に授業形態を自由に選択することができる。

初年度のオンライン授業の選択率は5.1%(884名中45名)に過ぎなかったが、これが2012年度には99.6%(913名)となり、教室授業の受講生は僅か4名となった。本論文では、開講以来12年間に得られた各種のデータをしめすとともに、受講生の学習スタイルや学習環境の変化について考察し、今後の高等教育の革新の可能性を展望する。

## 2 授業の概要

本論文で取り上げる科目は、同志社大学経済学部で開講されている専門科目「IT基礎論1」および「IT基礎論2」である。

これらの科目は主に文系学部の学生を対象とするICT基礎概論として開講されており、その具体的内容は、経済産業省所管の情報処理技術者試験「基本情報技術者試験」でカバーされる範囲を、連続する2つのセメスタで概説するものである。経済学部の新入生には、両科目を必ず履修登録することが求められている。

各科目には、オンデマンド型インターネット授業で実施するクラスと、教室での通常の対面授業で実施するクラスが設置されている。同一科目の各クラスは、基本的に同一教員の担当で同じセメスタに開講し、授業内容はもちろん、課題レポート、期末試験、成績評価基準等も全て同一として

いる。

課題レポートには、毎回の授業で受講者全員に提出を求める「オンラインクイズ」(小レポート)と、学期中盤に実施する「小テスト」がある。また、期末試験についてはインターネット授業のクラスも含めて、試験場で共通問題による筆記試験を実施している。

## 3 受講状況

### 3.1 受講者数の推移

2001年度春学期に45名でスタートしたインターネット授業の受講登録者数は、2005年以降毎期800名以上となり、2011年春学期には最大の1,035名が登録した。(図1)

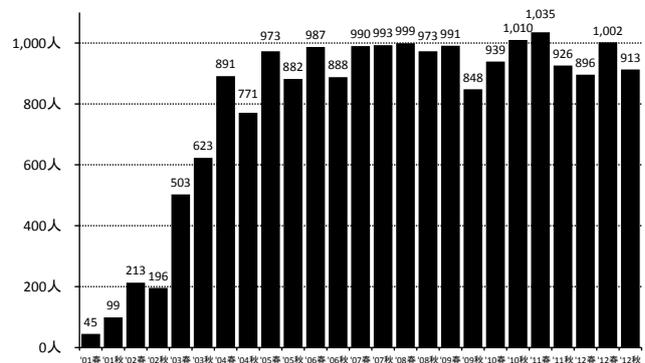


図1 インターネット授業受講登録者数の推移

のべ登録者数も順調に増加し、2012年秋学期までに約20,000名(19,586名)に達している。(図2)

### 3.2 授業形態別の選択率

インターネット授業の選択率は、2004年春学期以降、同時に開講されている対面授業クラスの選択率を上回り、2005年春学期以降は7割を超えている。さらに2012年秋学期には99.6%となり、

ほぼ全員がインターネット授業を選択していることがわかる。(図3)

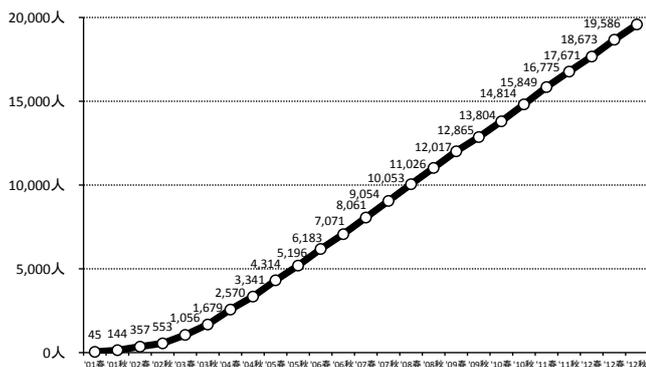


図2 インターネット授業ののべ履修登録者数

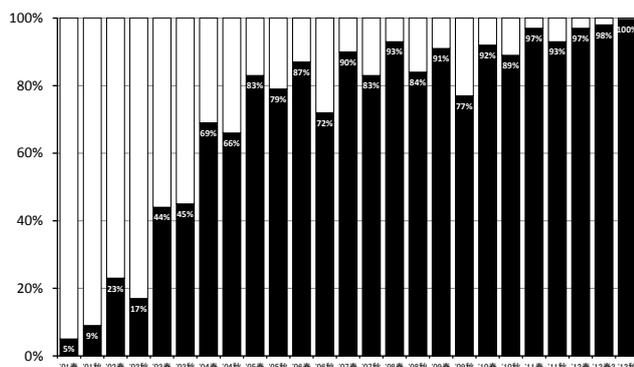


図3 インターネット授業の選択率

## 4 学習環境と学習スタイル

### 4.1 受講場所

2001年春学期の開講当初、60%の受講生は大学内で受講していたが、その比率は年々減少し、2006年春学期には、過半数が自宅で受講するようになった。現在では、71%の受講生が自宅で受講している。(図4)

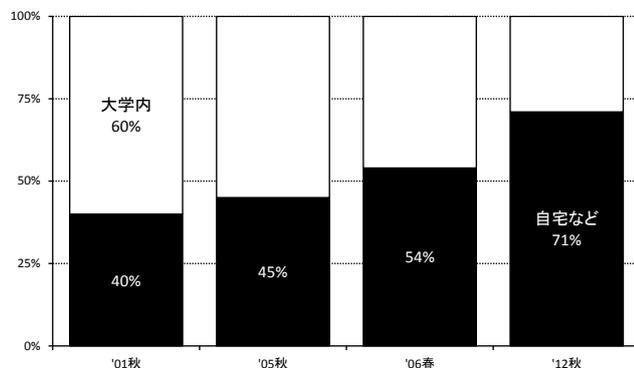


図4 インターネット授業の受講場所

### 4.2 質疑応答件数

2001年春学期の開講当初、テクニカルなものを除く授業内容そのものに関する質疑は45名の受講生に対して13件寄せられ、受講生数に対する比率は29%であった。その件数は、その後の受講生の

急速な増加にも関わらず年々減少し、2012年春学期の授業では、同時期にインターネット授業として開講された2科目計1,898名の受講生に対して、僅か1件にとどまり、比率は0.05%と、ほぼ皆無の状況となった。

## 5 おわりに

本論文では、同志社大学経済学部において2001年度以降12年間にわたって実施されてきたインターネット授業から得られた知見に基づいて、以下の①～③の3点に注目して考察を加えることとする。

①通学制大学においてオンライン授業の選択率がほぼ100%に達する科目が出現したことは画期的事象ととらえることができる。また、②当該授業において授業内容に関する教員へのオンラインでの質疑がほぼ皆無の状況であること、その一方で、具体的なデータとしては把握されていないが、③インターネット授業の受講生同士が自主的に数名の学習グループを構成し、自習スペースなどで課題レポートに取り組むようすが散見されることは極めて興味深い。

①については、どこでもインターネットを介してオンデマンドで受講可能というオンライン授業の特性が「Generation Z」と呼ばれる現代の学生に親和性の高い学習スタイルとしてスムーズに受け入れられていることを示すものと考えられる。

また、②は授業に対する受講生のフィードバックによってもたらされた成果だと考えられる。毎回の授業で全受講生の学習進捗状況と学習行動を確実に把握できるオンライン授業では、極めて高い効率で的確に授業内容を改善することが可能である。その結果、完成度が高く質疑応答の必要性がほとんどないティーチングコンテンツが実現されたのである。

そして最近の動向として特に注目されるのが③である。個人学習を前提とした自習室やカレル(Carrel)などの従来型の学習環境では、このような新しい学習スタイルに対応することは難しい。

昨今国内外の大学で整備が進むラーニングコモンズは、このような受講生のグループによる主体的な学習活動をサポートするものにほかならない。今後このような学習スタイルが定着するとともに、ラーニングコモンズへの需要はいよいよ増大することが見込まれる。

さらに、このオンライン授業受講生のオフライ

ンでの自主的グループ学習活動に教員が介入し、アクティブラーニングの要素を付加すれば、より高い教育効果と学習成果を得られることは確実である。高等教育における「フリップトクラスルーム」(Flipped Classroom)ともいえるこのような展開は、OCWや近年注目されているMOOCs(Courcera, edXなど)に代表される良質のティーチングコンテンツを受講する機会の拡大と相まって、高等教育の革新の可能性を示唆するものにほかならない。

最後に以上の考察結果を表1にまとめて、本論文のむすびとする。

表1 オンライン授業の新段階

事象	考察
① オンライン受講選択率100%	ジェネレーションZ ↓ 学習スタイルの変化
② オンライン質疑応答の消滅	受講生からのフィードバック ↓ 良質なティーチングコンテンツ
③ オフライン学習グループの出現	オンライン授業をベースとした 受講生主体のオフライン学習活動 ↓ ラーニングコモンズへのニーズ増大
今後の進展の方向性	・高等教育版「フリップトクラスルーム」 ・良質なティーチングコンテンツの充実 (OCW, edX, Coursera など) ↓ 高等教育の革新

## 参考資料

- [1] 宮崎 耕, 「オンデマンド型インターネット授業の有効性」, オフィス・オートメーション, 2001予稿集(秋号), pp. 121-124, 2001年
- [2] 宮崎 耕, 「オンデマンド授業に対するニーズと評価に関する一考察」, 平成19年度情報教育研究集会講演論文集, pp. 120-122, 2007年